

楽しくどんぐりを集める仕掛け

The Box that Makes Children Want to Collect Acorns for Fun.

太田 愛香¹ 布施 匡章²

Aika OTA¹, Masaaki FUSE²

^{1,2} 近畿大学 経営学部

^{1,2} Faculty of Business Administration, Kindai University

Abstract: At the Nara Prefectural Uda Animal Park, events could not be held due to the corona disaster, and parents and children who visited the park felt unsatisfied. In addition, the Nara Deer Protection Association is asking for donations of acorns as there is a shortage of food for the deer it protects during the winter. To solve these two problems, we created and set up an "Acorn Box", which collected 100 kg of acorns between October and December 2021, contributing to the satisfaction of visitors and the availability of feed for the protected deer.

1. はじめに

2020年2月頃より、新型コロナウイルス感染拡大防止の要請等により多くの施設等でイベントの開催が中止される状況が続いている。

奈良県立うだ・アニマルパークでも、月例イベントを始めとした動物とのふれあいや、対人形式のイベントの多くが中止となった。うだ・アニマルパークを訪れる利用者の多くは、小さい子どもを連れた家族連れである。うだ・アニマルパークでは、それら利用者に合わせて、ワークショップや動物との触れ合い体験など、有人で行うイベントが主流であったため、新型コロナウイルスの感染者数が多い時期にはイベントの中止を余儀なくされた。それにより、来園しても園内散策や動物鑑賞などといった活動しが行えず、来園者の満足度が減少していると考えた。

また、一般財団法人奈良の鹿愛護会では、傷病の鹿を治療、保護し公園へ復帰させる活動を行なっているが、冬季中に不足する保護鹿の飼料に当てるため、どんぐりの寄付を通年で募っている。

これらの課題を解決するため、うだ・アニマルパーク内に「どんぐりぼっくす」を作成・設置し、来園者にどんぐりを集めてもらう仕掛けを実施した。どんぐりぼっくすは松村(2016)の公平性、誘引性、目的の二重性を満たしており、うだ・アニマルパークの来園者の満足度を向上させ、集まったどんぐりを奈良の鹿愛護会に寄贈することで保護鹿の飼料を確保する仕掛けとなった。

2. 研究内容

2-1. どんぐりぼっくすの実験概要

「どんぐりぼっくす」は、木材と2枚の亚克力板を組み合わせて製作した。木製の箱の前面に2枚の亚克力板を差し込む形となっており、前面を透明な亚克力板にすることで、どんぐりの収集状況を利用者が把握できる。また、2枚の亚克力版の間に一部をシルエットのように切り抜いたイラストを挟み込むことで、イラストにどんぐりの色が着いて行く様を楽しめるようになっている(図1~3)。イラストの完成という達成目標を掲示することで、どんぐりの収集意欲の増進や、次回以降の来園のきっかけとなるようという考えからである。さらに、イラストを3種類用意することで飽きが来ず長期的に楽しめるよう工夫を施している。



図1 どんぐりぼっくす設置時の写真



図2 いっぱいになったどんぐりぼっくす



図3 どんぐりぼっくす

どんぐりぼっくすの上部に「どんぐりをあつめよう!!」と表記することで来園者に企画の意図を説明し、うだ・アニマルパーク内にある動物学習館の前に設置した。付近に紙パックやトングを置くことで、スムーズにどんぐり収集を開始できるようにしている。

来園者は好きなタイミングで用具を持ち、園内でどんぐり収集を始めることができ、集めたどんぐりはどんぐりぼっくすの上面に空いている穴から流し入れる。また、うだ・アニマルパーク以外の場所で拾ったどんぐりの投入も可能としているため、周辺地域のどんぐりも回収し飼料として役立てられていると推測できる。

基本無人で常時設置型の仕掛けを設置することで密が発生しにくい状態にし、コロナ禍でも比較的安全に遊ぶことができるものとなっている。これにより、対人形式イベントの中止により低下したと思われる来園時の満足度の向上を図った。

2-2. 実験結果

上記のどんぐりぼっくすを2021年10月17日から12月26日の間設置した結果、合計で約100kgのどんぐりが集まった。収集状況の詳細は、11月5日時点で約15kg、11月16日時点で約60kg、12月10日時点で約90kg、最終日の12月26日に約100kgとなっている(図2)。

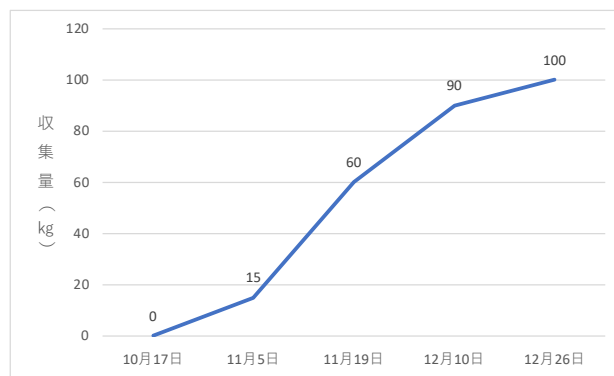


図4 どんぐりの収集状況

10月の間は設置してすぐであったためか、他の月と比べて収集スピードが遅くなっている。11月は期間も長いことや認知度が高まったと思われるため、大量のどんぐりが集まった。12月は開催期間の終盤かつどんぐりの時期からも外れるため、どんぐりの個数が減少していたと考えられる。

約2ヶ月間で100kg程のどんぐりが集まったことや、「子供を他の場所に誘っても動かず、来園してほとんどの時間どんぐりを集めていた」という父兄の声もあったことから、どんぐりぼっくすを用いたどんぐりを楽しく集める仕掛けは成立していると判断できる。

また、12月10日に、その時点で集まっていた約90kgのどんぐりを奈良の鹿愛護会に寄贈を行った。それ以降に集まったどんぐりも今後寄贈を行う予定である。

以上より、どんぐりぼっくすはうだ・アニマルパークの来園者の満足度向上と、保護鹿の飼料確保という2つの課題を同時に解決できる仕組みであると考えられる。

2-3. 考察

以下で、どんぐりぼっくすが来園者に楽しまれた要因を考察していく。

まず、コロナ禍の影響でうだ・アニマルパークでイベントがあまり開催されず、来園時の行動が制限

されていたことが大きな要因であると考え。「動物を見る」、「園内を散策する」以外にどんぐりを集めるというアクションを投入したことで、滞在時にできる選択肢を増加させた。園内散策と並行して行うことができ、参加時間の制限などもなかったことから、手軽に参加しやすかったのも大きな要因であると考え。

次に、どんぐりという季節性のある要因を用いたことで今の時期しかできないという特別感を与えられたと考える。どんぐりの実が落ちている時期や個数は限られているため、時期を逃すと翌年まで遊ぶことができなくなる。今やっておかないという意識が働いたとも考えられる。

また、どんぐりぼっくすの前面にシルエットが完成していく仕掛けを施したことにより、イラストを完成させるという目に見えるゴールを設定したことが良い影響を及ぼしたと考える。自分の集めたどんぐりでイラストに色が着いていく様子を見えるようにすることで、普通の箱にどんぐりを入れるよりも達成感や満足感を味わいやすかったのではないだろうか。

これらの要因が組み合わさることにより、約2ヶ月間で100kgものどんぐりが集まったのだと考える。今回は10月中旬からどんぐりぼっくすの設置を始めたが、9月ごろからどんぐりの実が落ち始める種類の樹木も存在する。次回以降は開始時期を早めるとより多くの量のどんぐりを収集し、奈良の鹿愛護会に寄贈することができると考える。また、毎年同じ時期にどんぐりぼっくすを設置することで認知度を向上させることができる。どんぐりの時期になる度にどんぐりぼっくすを利用するというように地域において定番化できれば、毎年一定量のどんぐりの回収が期待できるようになる。今後の取り組み如何で冬季の保護鹿の飼料が安定して集められるようになると考えられる。



図5 集まったどんぐり

3. 最後に

本稿では、どんぐりぼっくすという仕掛けを通してうだ・アニマルパークの来園者の満足度の向上と、冬季に不足する保護鹿の飼料の確保を両立する方法について考察を行った。結果、およそ2ヶ月の間に約100kgのどんぐりを収集・寄贈することができた。

利用者はコロナ禍の中でもうだ・アニマルパークの滞在を楽しむことができ、奈良の鹿愛護会は寄付によってどんぐりの貯蓄を行うことができる。この仕掛けを定番化することにより、どんぐりの時期にうだ・アニマルパークへの誘客を可能にし、毎年安定した量のどんぐりを確保できると考える。今後もどんぐりぼっくすの改良を行うことで、この仕掛けの有効性を高めていきたい。



図6 寄贈式（2021年12月10日、奈良の鹿愛護会事務局にて）

参考文献

松村真宏：仕掛け学―一人を動かすアイデアのつくり方、東洋経済新報社（2016）

謝辞

本研究は奈良県と近畿大学の包括連携協定に基づく「令和3年度うだ・アニマルパーク誘客促進事業」の一環として実施された。実施に協力いただいたうだ・アニマルパーク職員の皆様に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。